

# 肉用牛の改良増殖目標に係る委員からのご意見と今後の方向性について —肉用牛—

資料 6

項目	これまでの委員からのご意見等	今後の方向性
全般	<p>① 繁殖性、産肉性、肥育期間、おいしさといった多くの目標が掲げられており、その1つ1つが重要なものであることはよく理解できるが、それを全て達成しようというのは非常に難しい。実現可能性を考慮することも必要。</p> <p>② 新たな目標を設定した後、誰が何を分担して達成していくのかというPDCA (Plan Do Check Action)も重要。</p> <p>③ 産肉能力、繁殖性、飼料利用性などを通して生産効率の改良が重要であることは、異論のないところだと思うが、生産現場で脂肪交雑への偏重からなかなか一步を踏み出せないのは、肥育期間の短縮、繁殖性・飼料利用性の改良や改善が大切だ大切だと言いながら、農家経営にどの程度の効果があるか検討されていないことが大きいと考えられる。正確な経営分析を行った上で、これらの改良や改善が、農家、地域、あるいは国レベルでどのようなメリットがあるのかを提示できれば、方向を転換するいいきっかけになるのではと考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 改良目標の各項目は、いずれも重要な指標であるが、特に重点を置くべき項目を明らかにしつつ、適切な数値目標を設定する。</li> <li>● 肥育期間の短縮等に関するメリットについて、改良増殖目標の公表と併せて生産者等にPRしていく。</li> </ul>

○ 改良目標

項目	これまでの委員からのご意見等	今後の方向性
産肉能力	<p>① 素牛価格の高騰による枝肉重量を求める動きや一定月齢以上をブランドの要件とするなどの動きもあり、なかなか肥育期間が短縮されないが、こうしたフィールドと目標とのギャップをどのようにして埋めるのかといった論点が必要。</p> <p>② 素牛価格が高いなど様々な事情はあると思うが、目標はあくまでも平均を示すものであり、出荷月齢については、消費者と流通サイドのニーズの違いを考慮しつつも、できるだけ短縮する方向性を示すことが必要。</p> <p>③ 早期肥育を考える場合、出荷重量と肉質(特に水分含量)に課題。また、出荷日齢だけでなく子牛の導入(肥育開始)月齢の早期化との関係もクリアにする必要。流通サイドは、3等級を一番求めているが、4等級以上が生産量全体の半分程度を占めているため、その確保が困難な状況。脂肪交雑の追求は行き過ぎではないか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 特に和牛については、増体性に優れる系統、肉質に優れる系統など様々であること、また、各地で独自のブランド化等が進められていることを踏まえれば、一括りに肥育期間の短縮を推奨するものではないが、赤身牛肉の再評価など消費者の嗜好も多様化していることから、全体の方向性としては肥育期間の短縮を推進。</li> <li>● この場合、「おいしさ」の訴求等を通じて、取引上の評価を高めていくことが重要。</li> </ul>
おいしさの指標化	<p>① 少子高齢化が進む中、オレイン酸に係る数値化だけでなく、赤身肉のうまみについて、その機能性ととも掘り下げいくべきではないか。</p> <p>② 脂肪交雑は、見た目の美しさ、おいしさなど含めて、日本の食文化として捉えるべき面もある。</p> <p>③ コスト低減に向けた指標(増体重、肥育期間の短縮など)と脂肪交雑だけではない「おいしさ」による市場評価を高めるための指標が是非必要。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 脂肪に限らない、牛肉のおいしさに関する科学的知見の蓄積に努め、おいしさに関する新たな指標化項目や評価手法の確立を推進。</li> <li>● 和牛の脂肪交雑に係る能力については、既に十分な水準に達しているため、その育種価目標は、黒毛和種・褐毛和種・日本短角種いずれも、現状維持(±0)とする方向で検討。</li> <li>● 少子高齢化が進展する中、赤身牛肉の再評価など消費者の嗜好も多様化していることから、こうした多様化したニーズに応える肉用牛生産を図る上で有用となる手法〔肥育期間の短縮やおいしさの指標化等〕を推進。</li> </ul>

飼料利用性	<p>① 余剰飼料摂取量については、肥育段階で把握するのは難しいが、パイロット的でも良いので、種雄牛の直接検定と肥育段階での余剰飼料摂取量の関係を調べ、そのデータの活用を図っていくべき。</p> <p>② 余剰飼料摂取量を指標として増体性を追求していくのは難しいのではないか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 家畜改良センターにおいて、肥育期間中の飼料利用性の調査を平成 26 年度に開始したところ。</li> <li>● その結果を踏まえて、飼料利用性に係る指標を検討。</li> </ul>
繁殖性	<p>① 繁殖性に関する遺伝率は低いが、SNPなども活用しながら改良面でも取り組むことが必要。</p> <p>② 繁殖能力に関する目標には、初産月齢や分娩間隔を指標とし、子牛生産指数は選抜結果を評価する際に利用する方法もあるのではないか。</p> <p>③ 分娩間隔は正規分布ではなく、平均以上に長期化した分布のバラツキが足を引っ張っている中、何を指標として考えるべきか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 初産月齢と分娩間隔については、両者バランスのとれた繁殖性の向上が図られることが望ましいことから子牛生産指数を参考指標として記載することを検討。</li> <li>● 分娩間隔は正規分布ではないものの、全体の底上げと経営間の格差の縮小が重要と考えられることから、引き続き指標として設定。</li> </ul>
体型	<p>肉用牛においては、体型の大きさは、肉量との関連性が強く、体型に基づく選抜が効果を発揮している一方、体型の大型化が飼料の維持要求量の増大つながら、同時に分娩間隔との間に負の関連性が懸念されており、合い拮抗する関係にある。したがって、最適なサイズについて検討することが、重要。このため、繁殖雌牛の体型目標は削除すべきではない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 繁殖雌牛の体型目標については、現在値に係るデータ収集方法等について変更を加えた上で、これまで同様に定量的な目標を設定することとする。</li> </ul>

○ 能力向上に資する取組

項目	これまでの委員からのご意見等	今後の方向性
改良手法	<p>① 兵庫では近交係数 25%と高いため、これを改良面でも考慮していくべき。</p> <p>② 広域に流通する種雄牛の遺伝的能力については、同じ土俵で評価し、所有者の同意のもと公表すべき。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 近交係数の上昇を抑制するため、多様化に配慮した育種資源の確保・利用に係る取組をより推進。</li> <li>● 繁殖農家における交配目的に見合った種雄牛の選択等に資する取組〔同じ土俵での評価〕を推進。</li> </ul>

飼養管理	<p>① 繁殖性が低下しているのは、牛を見る人の能力が落ちているからではないか。適切な飼養管理技術があれば解決するはずであり、指導体制を構築することが大事。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 繁殖性の向上に向けた飼養管理の改善や、繁殖性に係るSNP情報等を活用した遺伝的能力評価手法の確立に向けた取組を、より積極的に推進。</li> </ul> <p style="text-align: center;">（※）国としては、本年度に、「地域ぐるみで行う繁殖性向上に係る取組」及び「繁殖性に係るデータ収集・分析（SNP分析）の取組」を支援する対策を講じているところ</p>
その他	<p>① モネンシン(飼料添加物)を用いることで飼料効率は 20%程度改善されるが、家畜改良増殖目標においては、こうした遺伝的な能力向上以外の飼養管理面での効果にも期待して設定すべきなのか。</p> <p>② 自分は雌牛(褐毛)を放牧に出しているが、周りは放牧をやめている人も多い。大規模農家だけでなく小規模でも頑張っている人を行政は応援すべき。</p> <p>③ 生産者サイドの視点だけでなく、「食べ手」である消費者の思いも重視すべき。特に 25%を占める 65 歳以上の高齢者に届ける肉についても考えて欲しい。</p> <p>④ 六次産業化の波に乗る意味でも、消費者(食べ手)の思いを直接的につなぐ意味でも、牧場併設または直轄のステーキレストランがあっても良いのではないかと。生産者の苦労に感謝するとともに、食に関する知識を深めつつ、食べるといった多面的な効果が得られるのではないかと。また、牧場の次世代の継承者は、新しい視点を持ち、食べ手の思いや要望のリサーチの場としての一助にもなる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● モネンシン等の飼料添加物については、法的な規制に則った適正な利用が図られているところであるが、その給与状況や増体性等に係る効果の定量的な把握は困難であること等を踏まえれば、家畜の能力等の目標を定める家畜改良増殖目標に、飼料添加物に係る記載を盛り込むことは不適當。</li> <li>● 新たな「酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針」の中で、肉用牛の6次産業化の重要性についても盛り込む予定。</li> <li>● 小規模・高齢化層を中心とした生産者の離脱等を背景に、和牛の繁殖基盤が弱体化している中、受精卵移植技術の効果的な活用等を通じた和子牛生産の拡大の重要性を盛り込む。</li> </ul>